
約束

鮎沢琴美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【Nコード】

N5316C

【作者名】

鮎沢琴美

【あらすじ】

入院している慶太と見舞いに訪れた親友との物語。

（前書き）

ありきたりなタイトルでごめんなさい。
評価・感想よろしくお願いします。

「ごめんなさい。」

その言葉を悲しそうに言って去っていった君の顔が最後の記憶かもしれない。

いや、違う。ぼんやりと強い光を思い出す。

そうだ、だからこうしてここにいるのだ。

病室の天井は空っぽの僕をもっと空っぽにさせる。

「ごめんなさい、やっぱり友達以上にはならない。」

わかっていた、でもほんのかすかな期待はしていた。

帰り道ぼんやりしていたから交通事故にあったんだろう。

ただそんなにたいした怪我じゃなかったから本当に虚しさだけが残る。

今日は朝から両親が見舞いにきたが、二人とも仕事があるから昼前には帰った。

怪我はひどくないとはいえ足の骨にひびがはいつていて痛いからあまり動きたくない。

テレビのスイッチをいれてぼーっとすることにした。

あまり入院していることは知られたくないな、その前のことを聞かれそう。

それにあの子も心配するだろう、俺をふった後に俺が事故にあっているんだから。

入院して良かったと思う、あと三日くらい。

事故にあつてなくても病人みたいになつていただろうから。

今なら落ち込んでいてもそれで普通だから良いんだ。

多少退屈でも時間が僕をゆっくり癒してくれることだろう。

そんなふうに関心についての整理をしながら過ごした。

もうこんな時間か。

陽は傾き、きれいな夕焼けを見せてくれる。
その時、病室のドアが開いた。

看護婦だと思っていたがその予想は外れた。

「慶太。」

俺の名前が聞き覚えのある声で呼ばれた。
びっくりした、そこには博が立っていた。

「何でおまえがここにいるんだ。」

「おまえが交通事故にあったって聞いてな。」

「・・・まあ入れよ。」

「嫌がらないんだな、俺のこと、あんなことが・・・」

「俺はそんな小さな男じゃねえよ。」

「そうか、それなら良かった。」

俺は窓を見た。

いや、俺は小さな男だったんだ。

俺と博は高校の同級生だった。

もうひとり、由美という俺の幼なじみがいた。

高校生活も終盤に差し掛かり、大学受験の可否の情報も飛びかい、

大きな行事と言えば、卒業式だけとなっていた。

その頃、いやそのずっと前から決意していたことをやろうと思っていた、
由美への告白だ。しかし、それがその後の俺の運命を変えた
ことは確かだった。

卒業式が終わり、話があると言って由美を呼び出した。

もうこれで半分告白しているようなものだったが、自然な方法など
思いつかなかった。

「好きだ、付き合ってくれ。」とだけいった。

由美は困った顔をしていた。

ほとんど笑顔しか見せない由美のその顔は悪い予感を感じさせた。

「あ、あのね・・・」

言葉を慎重に選ぶように切り出したが、あのねの一言でこの告白が失敗に終わったことはすぐにわかった。

ただ、俺を驚かしたのはその後だった。

「あのね、私、博君と付き合ってるの。」

え？の声も出なかった。

俺はよく博とつるんでいた。

そして由美とは幼なじみということでもつるんでいた。

ただ、博と由美はどこで知りあったんだ？

博に由美を紹介した覚えは・・・あ、あの時だ。

確かに紹介と言えるものではなかった。

博とゲーセンに行った帰り、偶然に由美と会った。

「慶太、知り合いか？」

「ああ、幼なじみの由美。」

そして由美が博にどうも、と一礼しただけだった。

「あの後ね、また偶然だけどばったり会ったんだ。それで慶太の話

とかしててね、結構盛り上がったちゃって、アドレス交換して・・・」

「もう、いいよ。」

俺の声は冷たかっただろうか。

自分の感情を殺し、平静を装った。

「あいつだったら安心だ、いいやつだし、何より俺の親友だからな。」

「

最後に笑ってみせた、かなり下手な笑顔だっただろうけど。

その言葉とは逆に俺は博とあまりつるまなくなった。

なんだか気まずい雰囲気には耐えられないからだ、あいつらは俺に気を遣ってたんだな。

そう思うと由美を思ってきた3年間がやけに空っぽに感じるのだ。

正直に言って、博と由美に対して怒りがあったのかもしれない、ただ、ここで怒りを爆発させても虚しさが一層増すだけにも思えた。

ひとつ、幸いだったのはこの日が卒業式だったということだ。
この先、二人に会うことはないのだ。
だけど目の前に博がいる。

「・・・で、どうしてここにいるんだ。」

「どうしてって見舞いに決まってるだろ、それ以外に何がある。」

「違う、どうして俺が入院してるって知ってるんだ？」

博は明らかに困惑した表情を見せたが、すぐ笑顔に戻り、

「そんなことどうでもいいだろ、ここにいちや悪いか。」

「悪くないけど、わかった、もういい。見舞いのくせに手ぶらか。」

「見舞いに来たからって何かもらえると思うなよ。」

お互いの顔を見合して笑った、自然と文字通り笑みがこぼれるように。

久しぶりの感覚だった、懐かしくて少し嬉しかった。

高校を卒業してそこそこの大学に入って、大学生ってこんなに退屈なのかと思った。

そして、高校までのがんじがらめの生活によって俺は生かされていたことを感じた。

退屈になると、適当に女の子を誘って遊ぶのが当たり前になっていた、そしてそれが今生きるメインにさえなっていた。

自分でもわかってるのだ、由美を心の中から消そうとしていることを。

気に入った女の子に告白して断られるとあの感覚がフラッシュバックしてくる。

俺はひとりぼっちだと改めて強く教えてくる感覚、あの高校のときもそう、博は友達で、由美は幼なじみで、けどもつと強い関係に俺は気づけていなかった。

そのときに一人だけ宙に浮いたような感覚になる、よく言うクラスの中で浮くというより、もつとその感覚が体中に染みしてくるのだ。

はつきり言つて、博の訪問は痛い。
やっと立ち直りかけていたからだ。

博はもちろん悪くない、ただ、その存在を前に少し戸惑ってしまうのだ。

でも博は友達だった、高校で一番の友達だった、だからこの空間、時間を分かつことができるのだ。

「なあ、由美は元気か？」

訊いていいものかわからなかったが、たまらず出てしまった。
しかし、博の反応は思ったより自然なものだった。

「とても元気だ、お前会いにいってやれよ、寂しがってるぞ。」

「なんで寂しがるんだよ、意味わかんねえ。」

「会いにいってやれ。」

気のせいかもしれないが、さっきの口調より幾分強く言っているように聞こえた。

会わないよと言いかけたが、

「そのうちにな。」

とその場をごまかした。

「覚えているか、高校時代のこと。」

「どのことだ？」

「全部だよ、入学して卒業するまでだ。」

「覚えてるよ、忘れたくてもこびりついてるからな。」

「おいおい。」

「冗談だよ、つい最近のようで、かなり昔のような気もする。」

「ああ。」

俺と博が知り合った、いや、偶然出くわしたといったほうがいい。
最寄りの駅から通っていた高校までは迷路のようであった。

話には聞いていたものの、学生の流れについていけば何とかなると思っていた。

しかし、その日俺は寝坊してしまい、駅に着いたときには時間ギリギリになっていた。

そんな時間だから学生もおらず、結局迷うことになってしまった。さすがに焦ったが、俺と同じ失態をしたやつがもうひとりいた、それが博だった。

俺は平然と歩いている学生服姿を見て、行き方を尋ねようとしたが、そいつもまた迷っていたのである。

そこから友達になるなど全く予想できなかった、ただ友達になる理由なんてそんなものだとも思う。

今、博を目の前にして、何があってもやっぱり友達だったんだと確認する。

この懐かしい空気でわかる。

「・・・そうそう、修学旅行で武田がさ・・・」

「・・・へえ、あの先生結婚したんだ・・・」

「・・・あの落書きまだ残ってるかなあ・・・」

不思議だけだと思い出話は飽きることが無い、どこにこれだけの記憶が埋まっていたのだろうと思うくらいにその当時の光景が鮮やかに浮かび上がる。

「あ、もうこんな時間だ。そろそろ帰るわ。」

「で、結局お前は何をしに来たんだ。」

「だからお見舞いだって言ってんだろ。」

もう何年も話していないはずなのに、会話は途切れることが無かった。

むしろ、なぜ今まで会うことを拒んでいたのだろう。

確かに会わなかった理由はあるが、それを簡単に超えてしまいそうな心地よさを博は持つてる。

「なあ、俺が退院したらどこか行くか、久しぶりに。」

「いいな、どこへ行こうか。」

「そのうち決めておくよ、じゃあまたな。」

「おう。」

窓の外はすっかり闇に染まっている、久しぶりにこんなに長く話をした。

「なあ、」

博は病室を出ようとする足を止めて振り返った。

「・・・」

「どうしたんだ？博？」

「・・・いや、いいんだ、あ、絶対由美には会ってやれよ。」

「わかった、わかった。」

「それじゃあ、またな。」

その夜、母親から電話がかかってきた、急用らしかった。

「慶太？やっぱり来てくれたんだね。親友だったもんね・・・交通

事故だったのよ。」

そう言つて、由美は泣き崩れた。

中央に飾つてある大きな写真の博は優等生っぽく写っていた、この野郎、いいかつこしやがつて。

「親友だから来たんじゃない、あいつにお前に会うように頼まれてたから来ただけだ。」

「あいつつて？」

「あいつだよ。」

俺はあごをくいっと上げて写真のほうへやった。

「会つたの？いつ？」

「事故のちよつと前かな？」

由美は黙り込んだ、また涙がこぼれたした。

鼻をすすりながら「良かった、良かった。」と繰り返した。

「ずっと会いたがつてたんだから。」

「うん。」

俺も涙を流していた。

こんなときの涙はびっくりするくらい自然にこぼれてくる。

仏教独特の重い空気で息が苦しくなり、俺は外へ出た。

こんな日に限つて、いや、こんな日だからこそ空はこんな青く澄んでいるのだろうか。

由美にはひとつ嘘をついた。

話によると、俺が博と会つてた時間、もうあいつはこの世にいなかった。

俺が交通事故にあつたほぼ同じ時刻に博も事故にあつてた。

もちろん、偶然だ、そう思いたい。

ただここから小さく見える由美の姿を見ると、俺が博の身代わりになつていれば、とも思う。

「俺より由美に会つてやればよかったのに、バカだなあ、お前は、

本当にバカだ・・・」

空を見上げても涙は止まらなかった。

「なあ、博、俺、もう退院したぞ、どこへ行くかまだ決めてなかったな・・・」

「じゃあ、俺達、二人とも迷ったのかよ。」

「どうする、もうあんまり時間ないけど。」

高校までたどり着く情報は何も無かった、本当に田舎で人がいなかった。

駅に戻って道を聞くのも時間がかかる。

俺はもういいかとあきらめかけていた、すると、博は言った。

「じゃあ、仕方ないからダッシュしよう。」

「ダッシュ？」

「こつちとこつち、ちょうど二つに道が分かれてるから、どちらかを選んで思い切りダッシュだ。」

「賭けだな。」

「そうだ、このままゆっくり迷っていても時間が過ぎるだけだ。」

「どちらかが着くか、どちらとも着かないか。」

「俺はどちらとも着くに賭けるけど。」

「俺もそっちに賭ける、もう時間が無い、行こう。」

そして二人は逆方向に走り始めた。

俺が選んだほうはいくらか走った頃に違っていると気づいた。

どんだん草が茂っていくからだ。

しまった。

俺は自分の遅刻決定を認め、あいつはどうだったんだろうか、と考え

た。

予定の時間をかなり過ぎて体育館に入った俺はなんだ？という目で見られた。

これからともに過ごす新入生達、おそらくこの後自分を注意するであろう教員達、鋭いまなざしを忘れない保護者、PTAなどである。それからもう一人、博がこっちを見て笑った。

入学式が終わって体育館を出ると博が駆け寄ってきた。

「俺の勝ちだったな。」

「完敗だ。」

「まあ、俺の勝ちはお前のおかげでもある。」

「どうして？」

「お前があっちを選んだから、俺は正しいほうに進めたんだ。」

「なるほどな、俺に感謝しろよ。」

「わかってるって。今度はお前に何かあったときは俺が身代わりになつてやるよ。」

「本当だな？」

「たぶんな。」

俺達は大声で笑った。

あの朝、はじめて会ったのに、もう友達だったんだな。

バカだな、お前は。
あんな約束守りやがって。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5316c/>

約束

2011年1月20日01時42分発行